【Session 2-4】

吉野　晃

「タイ北部、ユーミエン（ヤオ）の船送り」

鈴木　正崇

ユーミエンにおける船の位置付け

本発表は北タイのユーミエン（ヤオ）の「船」dzaang[1]の儀礼に関わる文化伝播と再創造の在り方を提示した。ユーミエンは山地民だが故地からの移住の途上で海を渡ったという神話を伝承し、「船」を日常的には使用せず、造船技術も持たないが、儀礼では「船送り」を祖先祭祀の一環として行う。生活世界の日常は、神話・儀礼と乖離していると言える。

「船送り」は、「掛燈」「做身」「超度」と続く一連の儀礼の分節の「析解」tsaeq jai にあたる「造船」儀礼で行われる。「析解」は若い世代の「家先」jaa-fin をあの世で苦しめる「傷神」tsun mien（siang sin）から分離して、十王図の前に引き出して裁判を行い、悔い改めた「傷神」（人形の形をとる）を藁船に乗せて、起源神話を含む「造船歌」や、「戒傷歌」を唱えて外界へ送り出し、焼却あるいは川に流す。ユーミエン独自の霊界への加入を巡るイニシエーション儀礼である。「船」は神話と結合して儀礼化され、祖先祭祀に深く関わる存在である。「造船」儀礼は外見上は台湾の漢人の瘟神「王爺」の船送りと類似するが本質は異なる。ユーミエンは漢族の儀礼の要素を換骨奪胎して、別の文脈に置換して独自の祖先祭祀に再構築した。他方、中国湖南省藍山県のヤオの「度戒」や年中行事で行われる龍船儀礼は、悪霊を集めて村外に導き焼却するもので、「傷神」の観念はなく、一方向的な攘却で、漢族の文化の影響が色濃いという。同系統の人々であっても、地域や歴史の違いで儀礼は性格を変える。中国のヤオと比較すると、北タイのユーミエンでは、霊界との交渉が双方向的で「船」が独自の神話や霊界の観念を前提として儀礼で使われると考えられる。

本発表では、ユーミエンの「船」を漢族からの文化伝播の一要素と考えている。漢語を使用し、道教儀礼の影響を強く受けた状況を見れば当然であるが、ユーミエンの独自性は生態環境への適応と、祖先祭祀の精緻な展開という二つの過程に顕著に表れる。第一は、山地民は水辺や川辺に居住する平地民とは異なり、儀礼における「船」に強い象徴性や非日常性を付与し、中核にある祖先祭祀を深く意味付ける媒体とする。生態や環境に基づく居住様式の差異が「船」の意味付けに関与する。第二に、ユーミエンの祖先祭祀では「傷神」を若い「家先」から分離して祖先の苦しみを解消することに重点がある。瘟神の「傷神」を追放する儀礼として「船」が使われ、霊魂のイニシエーションの様相もある。ユーミエンと漢族は父系血縁の重視では共通するが、祖先観は大きく異なる。「船」はユーミエンでは、漢族文化の換骨奪胎と新たな文脈への組み込みの儀礼要素として位置付けられる。

船の儀礼に関する一般化の試み

船について考える場合、水との関係が基本にある。海や川と結びつき、水上に浮かぶので、危険性の認知が根底にあり常に儀礼が伴っていた。日本には、船乗りの仕事の危険性への警告として「板子（いたご）一枚下は地獄」という諺があり、船の下は地獄に譬えられる。船での航行は、日常とは異なる「境界の時空間」で、禁忌を伴うことが多く、船自体が神霊と一体になったり、祭具にも変貌する。嵐に遭遇した時

には、海を鎮め難破を防ぐ祈願がなされ、究極には人身供犠も行われた。日本の古代の記録『魏志倭人伝』では、航海に際して「持衰（じさい）」という特別な人間を乗せ、禁忌を守らせて船の安全を祈願したとされる[2]。オセアニアではカヌーは呪術の焦点となり、大海原の航海の危険を克服する願いが託された。

船の儀礼では、実用の船、儀礼用の船、想像の船の三種が区別されよう。船は「乗り物」であり、乗り手は誰かを考えると、人間・霊魂・人形、そして供物が加わる。実用の船の素材は樹木で、人工物である船の造成には複雑な儀礼が展開する。日本の事例では、樹木の伐り出しと運搬、船の完成と進水（船降ろし）などに儀礼を行い、木の霊が憑いてくるので「木霊（こだま）返し」を行う。船自体を祭具として祀ることも多く、龍の顕現や水神の乗り物と見なされ、「眼」が横面に描かれて、「いのち」があると観念される。船の形状は龍や鳥と結合し、霊魂の乗り物としても神聖視される（うつろ船）。日本や南中国の沿岸部では、航海安全の祈願のために、船中にフナダマ（船魂）を祀り、御神体は女神として白粉・女性の髪の毛・裁縫具・サイコロなどを奉納する。これは女性が船に乗ることを禁忌とする場合、守護神霊には女性性を付与して男性の加護を願うという象徴的逆転の事例であろう。

船は雨乞いや豊穣祈願など自然と深く関わる農耕儀礼に関与し、神霊・祖先・死霊の送迎、虫送りや厄病送りなど禍なすもの祟りなすものの祓いや攘災の儀礼の媒体となり、不可視の神霊との交渉に関わり、死霊の鎮めや他界での再生の祈願が籠められる。船は浮遊する霊魂と連動する。冥界へ霊魂を運ぶ船のイメージは、鳥の信仰と習合し、天空を飛ぶ「天の鳥船」に展開して太陽信仰と結びつき、大きなコスモロジーの一角を形成するのである。

以下に、船の儀礼の特徴を一般化して列記しておく。

① 流動性。不安定と安定、危険と安全、浮かぶと沈む、統御と転覆の両極を揺れ動く。
② 媒介性。此岸と彼岸、現世と他界を結ぶ。崖上の船（懸崖葬）。精霊船。墓所内の船。
③ 浮遊性。海上の船、河に浮かぶ船。漂う。流される。移動の感覚や移住と結合。
④ 複合性。龍や鳥と複合。龍船。天の鳥船。鳥人と船。宝船と夢。米俵を満載する船。
⑤ 境界性。水界と川面、人間界と霊界。結合と分離。洞窟の中の船。供犠。橋と類似。
⑥ 禁忌性。女性の乗船の禁忌。船降ろし儀礼には女性を乗せる。女装した男性を乗せる。
⑦ 越境性。送迎や祓いなどで境界を越える。攘災。鎮送。祟りなすものを送り出す。

※文中の語「析解」の表記については、本報告書第Ⅱ部 Session1-4 吉野晃「タイ北部、ユーミエン（ヤオ）の船送り」の註（p.146）を参照されたい。（編者）

註

1――中国語は海上の「船」と河川での「舟」を区別するが、ここでは「船」に統一して論じる。漢語の区別についても検討する余地が残されている。

2――原文では持衰について詳細に記述している。それによると、当時の倭人（日本人）が海を渡って中国に来る時には、持衰と呼ばれる一人の人物を乗せて、頭髪を梳かず、虱をとらず、衣服は垢に汚れたままで、肉食もせず婦人を近づけない状態にして、死者の喪に服しているようにさせる。もし、航海が順調であれば、人々は彼に生口（奴隷）や財物を与えるが、途中で旅行者に病人が出たり、暴風雨の被害に遭った時は持衰を殺そうとする。凶事の発生は持衰が禁忌を守らなかったからだとされる。